

苧麻^{ちよま}と人のあいだにあるもの

―アニミズムの視点から―

須田 雅子

はじめに

イラクサ科の多年草「苧麻^{ちよま}」は、高級麻織物「上布」の原料として知られる。苧麻の主要生産地に東北の奥会津昭和村（福島県）と南洋の離島、宮古、八重山諸島（沖縄県）がある。苧麻は植物もその繊維も、昭和村では「からむし」、宮古、八重山の島々では「ブー」と呼ばれる。

私の苧麻との最初の出会いは、二〇〇八年、昭和村で目にした「からむし織」という平織りの素朴な布だった（写真1）。

東京で会社勤めをする日々、その布が頭をよぎることがあった。各地から昭和村にやってきた「織姫」⁽¹⁾と呼ばれる女性たちが、からむしという草が布になるまでの工程を学んでいるという。大量生産の逆をいく営みに心惹かれた女性たちが、日本の原風景の残る里で浣刺と過ごす様子が目に浮かんだ。

二〇一四年九月、私は沖縄本島に近い久高島で中秋の名月を眺めていた。都会での会社勤めで生命力が萎えていく中、「自分のいのちを生かせる場はないものか」と悩んでいた私は、中天にかかる月に「私を何とかしてください」と願った。すると、翌朝から何かが動き出した。まず、那覇市伝統工芸館で沖縄の染織工芸に感銘を受けた。そして、那覇三越で開催していた「やまあい工房」展では、藍染め作家の上山弘子さんが沖縄民謡「ていんさぐぬ花」を歌い、詞の意味を教えてくれた。この日を境に沖縄の染織文化が気になり始めた。

三か月後、八重山諸島を訪れた。久高島のお月見会⁽²⁾で一緒に染織作家の平井真人先生のスクーリング⁽³⁾に参

加し、八重山上布の原料が昭和村で「からむし」と呼ばれる苧麻だと知った。

東北と沖縄という遠く離れた土地に、苧麻を織る営みが受け継がれている。調べてみると、昭和村は国の重要無形文化財である新潟の越後上布・小千谷縮布の原料となる良質な苧麻の繊維の生産地であった。沖縄では八重山諸島で苧麻文化が受け継がれているほか、宮古島にも国の重要無形文化財、宮古上布がある。

上布は夏向きの上質の麻織物で、かつては朝廷や将軍への献上品として用いられていた。宮古、八重山諸島では、一九〇三年に人頭税が廃止されるまで貢納布として上布が織られていた。

昭和村と宮古、八重山諸島の苧麻文化を卒業研究のテーマに決めた私は、二〇一五年五月、昭和村にからむしの糸作り体験に出かけた。村の魅力に心を鷲掴みにされた私は、すぐに移住を決めた。六月、再訪した昭和村で里の風景を眺めていた時、「悩むことなどないからこっちへ来い」と何か大きな存在に告げられているような気がした。必然とは思えない偶然（シンクロニシティ）が次々と起こるようになった。七月に会社を辞めた私は、空き家の改修が済んだ九月、昭和村に移住した。

見えない苧麻の糸に導かれるように、豪雪地、昭和村と、亜熱帯の宮古、八重山諸島で苧麻の聞き書きをして八年になる。関心を寄せてきたのは、苧麻と人のあいだにあるものだ。それは自身の人生を大きく転換させた苧麻との奇縁に端を発している。まるで苧麻の神様に動かされているような気がしてならないのだ。

苧麻の話を聞いて歩いていると、「苧麻の神様に動かされているようだ」と思える人たちが多く。神様と言わないまでも、苧麻という草の魂と深い所で交感しているようだ。また、一見、突拍子もないように思える行動の背後に、まるで個人の存在を超えた（あるいは下支えする）大きな力が働いているように感じられたりする。

これらのことから私が想起するのは「アニミズム」である。梅原猛は『人類哲学序説』で「アニミズム」を「あら

ゆるものに霊が宿り、神がいたるところにいる、という思想」⁽⁴⁾と述べている。

また、先に「芋麻の神様」と述べたが、「アニミズム」について多くの著書を残した岩田慶治は、『カミと神』で、「魂^{たま}、魂^{たましい}を含む日本人にとつての原初の靈魂觀念を片仮名でカミと表記し、そののち歴史的・文化的に発展した形態を漢字で神と表記する」とし、両者を区別している⁽⁵⁾。

本稿でも岩田の表記に倣い、カミと神を分けて表記する。私が神様と感じているもの、そして芋麻と人のあいだにあるものが、どのような概念でとらえられるのかを、芋麻にかかわる人々への聞き書きから探っていく。

第一章 芋麻の繊維と人

一、神性、靈性を宿す

沖縄の風習の一つに「マブイグミ（魂込め）」⁽⁶⁾がある。子どもが転んだり、驚いたりした時に、魂の一部が身体から抜け落ちてしまうと考えられており、魂が元の身体に戻ってくるようにまじないをする。八重山の島々では魂込めに芋麻の繊維を使う。

八重山諸島の竹富島では、落とした「ターシ（魂）」を身体に呼び戻す儀式を「ターシクミ」と言う。八重山上布やミンサー織など島の伝統織物の担い手であった内盛スミさん（大正十四・一九二五年生）（写真2）によれば、人には魂が七つあり、魂というのは飛びやすいそうだ。スミさんの孫がガジュマルの木から落ちた時、落とした魂はすぐに拾わないといけないので、「ブー（芋麻の繊維）」とコップ一杯の水を持って、孫と落下した場所に行った。そこで小さな石ころを三つ懐に入れてやり、「今日はこの子がここで魂を落としたのを拾い上げさせてください」と願い、「魂入れ、入れ、入れー」と唱える。ブーに結び目を七つ作り、孫の手首にかけてやる⁽⁷⁾。ターシクミのやり方は、子ど

もの頃にお婆さんがやるのを見て覚えたそうだ。

手首に巻いたブーの両端は撚りつなげるだけなので、三、四日くらいでなくなっている。子どもはターシクミをやらないと夜も寝られずにゴロゴロしているが、ターシクミをやるだけでも命がすつきりして効き目があるのだという。

竹富島には年間を通して数多くの神事がある。神事を司るのはツカサと呼ばれる女性たちだ。内盛スミさんの家は代々ツカサを出している。ツカサのなり手については、何年で交代という持ち回り制ではなく、神から当人に直接、呼びかけや導きがあるという。「自然と神様が命令するから分らんわけさ」とスミさんは言っていた。竹富島では「神様が人を動かす」というのは周知の事実なのだ。

スミさんの長女、田中愛子さん（昭和二十七・一九五二年生）は、高校進学で島を出た後、結婚して関西に長く暮らしていた。ところが、子どもが皆、社会人になった後、釣り好きの夫が「竹富島に住みたい」と言い出し、愛子さんを残して島に移り住んでしまった。愛子さんはやむを得ず、夫を追って竹富島に戻ったのだが、ある時ツカサをしていた叔母から「ツカサをやらないか」と声をかけられた。ツカサに立つこと、つまり神の世界に立つことについて、何も知らなかった愛子さんは、深い考えもなく承諾した。愛子さんは見えない糸に操られるように竹富島に引き戻され、神に仕える身となった。

愛子さんが芋麻の繊維を使う風習「ターシバイ」⁽⁸⁾について教えてくれた。竹富島では、死後二十一日目の「ミナンカ」⁽⁹⁾の法事で、芋麻の繊維に結び目を四つ作り⁽¹⁰⁾、クルクルツと丸めたものを、家族や来場者に配る。各自その場で手首に巻くのだが、これも端は撚りつなげるだけだから、四十九日までには大抵落ちてなくなっている。

スミさんは二〇一九年一月に亡くなった。愛子さんはミナンカのために、結び目を四つ作ったブーをたくさん用意した。愛子さんもそれを腕に巻いたが、ブーが手首から消えた時が母との別れの日となると、なるべく落としたくない。愛子さんは手首のブーに「落ちるな」と願い、端が外れそうになると撚りをかけ直したりする。「ブーが腕に

あるうちはまだ母が一緒にいるような気持ちだった。ブーが外れた時は、もう本当に亡くなったんだと相当悲しかった」と愛子さんは語る。

愛子さんは家の片隅の一畳くらいの所にブーを植えている。最近五十日前後で刈り取り⁽¹¹⁾、「パイ」というステレンスのヘラで繊維をとる。ブーは祭祀で神様に税金として納めるのにも必要だ。繊維を裂いたものを親指と小指の間に8の字に巻き、まとめたものを神様に納める。

竹富島では芋麻に神性や霊性が備わっている。芋麻の繊維が見えないものと人を媒介している。

二、人に挑ませる

福島県の奥会津昭和村では、からむしの繊維は貴重な換金作物で、三百年近く前から越後（新潟県）に出荷されてきた。

昭和村では年に一度、夏の土用入り（七月二十日頃）からお盆の頃まで、からむしの刈り取りをする。からむしの本場、大芦集落の五十嵐善信さん（昭和十一・一九三六年生）、玲子さん（昭和十二・一九三七年生）夫妻の畑のからむしは、すらりとして美しく、青く若々しい茎はしなやかで柔軟性がある。刈り取った茎から表皮を剥ぐ「からむし剥ぎ」と、繊維をとる「からむし引き」は、ただの作業ではない。

「からむし剥ぎ」で善信さんはまず、前に置いた茎の中から一本を左手でつかむと、体の正面で、茎の中心付近を両手で持つ。左右の手を小さくずらして中の芯を折ると表皮と芯の間に隙間ができる。その隙間に指を入れ、芯に沿って滑らせて表皮を剥ぐ。善信さんの前に二本の表皮がきれいに揃えて置かれる（写真3）。「なんぼやってもこれでいいっていうことがなくて、覚え切ったっていうのはねえわなあ。これよりももっと良く、もっと良くと思う」と善信さんは語る。

表皮から繊維をとり出す「からむし引き」は女の仕事だ。昭和村ではカラムシヒキバン、ヒキイタ、カナゴ⁽¹²⁾などの道具を使う。玲子さんはからむしの表皮を一本手に取ると、表皮の内側（茎側）に右手で持ったカナゴの金属の刃を押しあてて粗皮にプチっと切れ目を入れ、そのまま勢いよく表皮の端まで刃を滑らせる。粗皮が剥がれ、中の繊維が現れる。カラムシヒキバンに二枚ずらして重ねたヒキイタの上に繊維を置く。左手で繊維の端を引きながら、右手のカナゴの刃で繊維に残った緑の部分をシャツシャツと削ぎながら取り除いていく（写真4）。使い込んでやや薄くなったヒキイタは、玲子さんの力の入れ具合に応じてよくしなる。

引かれたばかりのからむしの繊維は、透明感があり真珠の光を流し込んだように輝いている（写真5）。人との内奥での交感を経て、見えるものとして現れ出たからむしのカミが、「自分の本当の姿を見出してくれた」と全身で伝える歓喜の煌めきのような。農産物の生産工程の一つである「からむし引き」だが、私には人が苧麻のカミを人間の世界に現出させる「儀式」のように思える。

第二章 苧麻の糸と人

一、親しく交わる

苧麻の糸を作るために繊維を水に湿らせて裂く時、指の爪は繊維が自然に裂ける所を裂く。昭和村でからむしの糸作りを私に教えてくれた元繊維姫の水野江梨さん（昭和五十二・一九七七年生）は、からむしが「ここ裂いて」という所を裂くのだと教わったそうだ。裂いた繊維を口にくわえながら績む人も多い。繊維の細さを見極めるのは指の腹や

舌の感覚だ。糸を績む人は感覚を研ぎ澄ませ、身体のごくわずかな接触面を通して繊維を一本の糸に変えていく。

宮古島の友利集落で緯糸作りをする松原良子さん（昭和六・一九三一年生）は、苧麻績み⁽¹³⁾を始める前に、「ンミユウ（績んだ糸）」をためていく容器に、「サスケ⁽¹⁴⁾の神様助けてよー」、「今日も一日きれいに作らせてちょうだいねえ」と言い、「上等のブーになりなさいよー」とブーに語りかけながら糸を績む（写真6）。昔のお婆さんたちは何にでも神様が宿っていると信じており、ウカマ（カマド）の神様、人間の神様、ブーの神様、食べ物の神様などがいて、神様が助けてくれないと農作物も何もできないのだと教えてくれたそう。夜にランプもつけずにブーの糸をつないでいた宮古の昔のお婆さんは、「指が分かるよ。指が目よ」と言っていたという。

大田美代さん（昭和十一・一九三六年生）は宮古島出身で石垣島に長く暮らした。宮古上布の織り手だった母は、大東亜戦争中、空襲があつても防空壕にも入らずに機織りをしていた。年をとってからは体中に痛み止めの湿布を貼り、「おんまんやまん（なんにも痛くないよお）」と言いながらブーを績んでいた。「ブーで稼いだお金も湿布代に消えて、ちつとも儲かってない」と美代さんが懐かしそうに笑う。子どもの頃はブーを績む母に寄り添っていた。

石垣島の繁華街でスナックのママとして働いた四十年、客を相手にしゃべらなければ仕事にならなかった。「アメリカ世、ヤマト世⁽¹⁵⁾と人生の裏街道を歩いてきた」と語る美代さんは、七十歳でスナック引退後、八重山上布の作家の新垣幸子先生⁽¹⁵⁾に教わってブーを績み始めた。

一人静かにブーと過ごす時間は、「こんな世界があつたのか」というほど穏やかなものだった。ブーは自然のものだから、一つ一つが違うえ、環境にも左右される。姿形がきれいでも根性の良くないブーもある。美代さんもブーを績む時、ブーに話しかけている。途中で何本にも分かれてしまう太っ腹なブーには「ああ、おまえ、あんまり贅沢させられてこんなになってるんだらう。食べ過ぎたんだなあ」と言う。ひねくれているブーには「疲れているんでしょね。二、三日休みましようね」と慰める。植物とか動物とか命のあるものは敏感だと美代さんは言う。話しかけても

返事はしないが、態度で返してくれる。「上等にやれよー」と話しかけると、本当に上等に裂けてくれる。「一緒にがんばろうねえ」と話しかけても「はい」とは答えてくれないが、言うことを聞いてくれる。「ものが言えなくても魂はあるんだなあ」と美代さんは感じている（写真7）。

二〇二一年に体調を崩して入院した時は、「もう終わりかと思った」と振り返る。運よく生きかえり、退院後は沖縄本島で娘夫婦の世話になっている。退屈でどうにもならなかったとき、娘に「ブーでもやってみたら？」と勧められ、新垣先生に電話をしたらブー（繊維）を送ってくれた。ブーの繊維を細く裂いては黒い布の上に並べていき、ブーと指の腹の感触を確かめながら、丁寧糸に糸していく。美代さんが言う。「ブーが相当いい友達になってる。長年付き合っても、もう性格もどういふものであるっていうのが分かっているから。こんなに病^{やまい}あがりでさあ、何にもできなくなっても、ブーを見たら、すこし心が落ち着くさあね。ブーに感謝、感謝している」。

からだの調子が悪い時に芋麻の糸を績むと楽になると言う人がある。瞑想時の呼吸に近くなるのかもしれないと語る人もいる。私も芋麻の糸を績んでみたが、意識の表層のざわめきが消え、内側の穏やかな場所にスツと入る気がした。

昭和村の五十嵐カヨ子さん（大正十四・一九二五年生）は、からむし織の熟練の織り手だ。九十半ばを過ぎても糸を績み、少し前まで機織りもしていた（写真8）。ご主人が亡くなり、一人暮らしをするようになって二十年以上になるが、からむしを績んでいると、ちよつとくらしいの不安など吹き飛んでしまうそう。手は勝手に動き、頭は別のことを考えている。無心に手を動かしていると趣味の短歌のアイデアもふっと沸いてくる。カヨ子さんは、からむしを績まなければならないから績むのではなく、績んでいないと自分が保てないのだという。畑仕事と同じで、からむしは癒しだ。逃げ場と言ってもいい。「からむし績んでずっと本当楽しいんだ。なーんか不思議なんだよなあ。これつかむと安心ちゅうのか、落ち着くちゅうのか。からむしに助けらちええ生きてられんの」と笑う。

カヨ子さんの同級生の本名オマキさん（大正十五・一九二六年生）も、生活のためにからむしを織ってきた。からむし引きを始めたのは小学一年生の時だから、からむしとの付き合いは九十年になる。今もからむしの糸作りをしているオマキさんは、長年の経験で身についた技は魔法のようだという。糸車のクダツキ（管）にからむしの糸をかける時、糸をつかむだけで、からむしがひとりでに輪にたたまれてクダツキにかかっていく。オマキさんが「こうしよう」と頭で考えなくても、からむしはオマキさんのために自ら役目を果たしてくれる（写真9）。

二、見えないものに支えられる

私が初めて宮古島を訪れた二〇一六年に宮古芋麻績み保存会の会長だった下地ヨシさん（昭和七・一九三二年生）は、毎朝六時前に起床し、先祖の神、守護霊であるマウ神^{ガシ}（¹⁶）、台所のウカマ（カマド）神を祀る棚に、水やお茶、お菓子を供え、手を合わせるのが日課だと話していた。一度、夢でウカマ神に「なんであんたは線香の灰を汚してあるか」と叱られたそう。翌朝、神棚を見ると、香炉の灰が飛び散っており、慌ててきれいに拭いた。宮古ではそういう不思議な話をよく耳にする。

最近あまりやらなくなったようだが、宮古では子どもが生まれると十日で神の名^{カシヌナ}がつけられる。代々つながっている御嶽の神の名を書いた紙をいくつかお盆に載せて左右に揺らし、最初に落ちたものがその子の名になる（¹⁷）。ヨシさんは幼い頃、「カウサガマ」と呼ばれていた。子どもの頃から神と結びついている。ヨシという戸籍上の名前で呼ばれるようになったのは小学校に入ってからのことだ。

芋麻績みのやり方は、子どもの頃、母の仕草を見て自然と覚えたそう。夫が四十二歳で他界した後、ヨシさんは女手一つで四人の子どもを育てるために懸命に働いた。夫は死後も心配しているようで、夢に出てきてはヨシさんにお金を渡そうとする。「心配をしなくても大丈夫だから」と、ヨシさんは後世^{ゴシ}（¹⁸）の夫に感謝の気持ちを伝え続けた。

ブーの繊維はどんなに細く裂いても強く、指で撚りつなぐのにも力がある。ブーを撚る時に土台となってきたヨシさんの右手の人差し指は、第一関節のところでも不自然に折れ曲がっていた。尋ねると「お母さんのお母さんが、指がこうなっていたのよ。何で指があんなになってる？」と思い、子ども心で見ていたのよ。だけど、いつの間にか（自分の指も）こうなってる」。

二〇一八年八月末、ヨシさんは糸車^ヤで撚りかけをしていて立ち上がった後、心筋梗塞で倒れ、帰らぬ人となった。「子どもたちに迷惑をかけたくない」、「一日でも長く苧麻績みの仕事を続けたい」と話していたヨシさんは、望み通りに生ききった（写真10）。宮古島の苧麻の糸は、手先の技術を超えた見えない存在に支えられている。

三、糸の表情

宮古上布の作家の新里玲子^{しんざと}さん（昭和二十三・一九四八年生）は、上布を織るための苧麻の績み糸を島のお婆さんたちから買っている。そしてある時、糸の持つ表情がお婆さんそのものであることに気づく。

玲子さんに糸を提供してきたのは、土にまみれて働いてきた田舎のお婆さんたちだ。八十代、九十代になっても畑で野菜を作り、忙しく働く合間に、ブーの糸を作って売りに来る。「気持ちの強い人が続いている」と玲子さんは語る。指の指紋がなくなるほど苧麻績みをしてきた熟練のお婆さんたちも、年齢とともに感覚が鈍るのか糸が少しずつ太くなる。「糸の魅力は人の魅力」と考える玲子さんは、太めの糸を帯に使う。玲子さんは語る。「高齢者の太い糸ほどダイナミック。島の女性の底力が凝縮された世界。細い糸以上に島の力強さが凝縮されている」。

第三章 苧麻の機織りと人

一、土から育てる

「からむし織体験生事業」で昭和村に来て十八年になる山内えり子さん（昭和五十二・一九七七年生）は青森県の津軽出身だ。津軽では江戸く明治期、苧麻や大麻を栽培し、それらの繊維で糸を作って織った野良着を補強し、保温性を高めるために、丹念に「こぎん」を刺していた。えりさんは、こぎんを刺す布から自分で作ってみたいと考え、昭和村にやってきた。

からむしを土から育て、繊維をとり、糸を作り、機で織るまでの工程を一通りやることは、「生きる自信につながっている」とえりさんは語る。ただ、そのためには楽はできない。

からむしの生産は農作業だから、体を使うし、汗もかく（写真11）。土いじりで汚れるし、虫にも悩まされる。脛や二の腕をヌカガやブヨに刺されて痛い思いをするのもしょっちゅうだ。それに、からむしを食草とする毛虫（フクラスズメ）を見つけたら殺さないといけない。生きている毛虫をからむしの葉に包み、「ごめん」と足で踏みつける。

からむしの刈り取りは夏の一番暑い時期に行われるので、早朝四時半頃、涼しいうちに畑に行き、一本一本、鎌で刈る。時期が遅れると表皮が固くなり、繊維の質が落ちる。からむしは待つてはくれない。からむしが若々しさを保っているうちに、刈り取り、引く必要がある。

「土に触れることが、人間として一番（生きていくこと）が実感できる」とえりさんは語る。大変だが様々な気づきがあり、やればやるほど面白い。今年の反省を活かすために来年もまたやりたいと思う。

からむし引きの時も、糸を作っている時も、織る時でも、できるだけ、からむしのなりたいうようにさせてあげたい。だが、作業に乗ってきて自分のペースに偏り、からむしに対してどこか手抜きのような感じになると、からむしは「そうじゃない!」、「こっち向いて!」と腹を立てたような態度をとる。からむしは木綿や絹のように素直でやわらかい繊維ではない。津軽人の特徴である「じよつぱり（頑固者）」に近い。まっ直ぐで不器用で「自分と似てる」とえ

り子さんは笑う。実際、木綿やリネン（亜麻）を織ろうとした時、糸が優しすぎて、どう織ったらいいか分からなかったそうだ。似たもの同士のからむしとえり子さんが、ともに喜んだり悲しんだりして深い所で交感している。

からむしは十数年で芽が出てこなくなったり、繊維に赤みが差したりするため、根の植え替えが必要になる。えり子さんは、からむし畑に隣接する畑（植え替え予定地）で野菜を育てている。野菜の様子を見に行くうちに、作業のない時でもからむし畑に通うようになった。日々、からむし畑を眺めていると、季節や時間による風の吹き方や陽の当たり方の違い、そこにいる虫や鳥など何かしら気づくことがある。雪の季節にも畑に行く。「ここにこの葉っぱが落ちてくるんだ」などと思いながら畑の辺りを眺める。一つ一つはたわいないことかもしれないが、何年も続けていれば、からむしのことをもっと知ることができるだろう。

「自分の根っこを掘り下げて、どんどんそこを固めている」とえり子さんは語る。故郷、津軽の人たちがかつてどんな思いで暮らしていたか、その追体験のようなことを昭和村でしている。えり子さんは衣食住を自分たちでまかなう「土着的」な生活文化に惹かれている。自分で育てたからむしで織った布で野良着を作り、こぎんを刺したい（写真12）。かつての百姓のように暮らすことがえり子さんの求める生き方だ。

二、鎮魂の機織り

宮古島の豊見山カツ子さん（昭和十八・一九四三年生）は、幼い頃から母が機織りをする姿を見て、ブーの糸に触れて育った。若くして父が亡くなった後、父方の祖母と宮古上布の織り手の母が暮らしを支えた。カツ子さんは母が上布を織るのを、いつも横で立て膝をして見ていた。十二歳くらいになると、母が機を離れた隙に何センチか織っては針で整えていた。子どものやることだから間違ひもあっただろうが、母は「助かったあ」と喜んでくれた。

カツ子さんが十四歳の時に母が亡くなった。中学を卒業したカツ子さんは、家計を助けるために機織りを始めた。

カツ子さんの手足の指のかたちは母親にそっくりなのだという。布を織る自分の手が、記憶の中の母の手と重なる。夫を喪った母、母を喪った娘が宮古上布を織っている。同じ音を聴き、同じ動作を繰り返す中で、極細の糸が布に織り上げられていく。時空を超えて二つの世界が重なっている。カツ子さんの魂がなだめられ、それが亡き母の魂にも伝わっていく。これも鎮魂の一つの形だろう。

三、苧麻と戯れ、自由に織る

宮古島の岩本大輔さん（昭和四十八・一九七三年生）は本土出身だ。ブラジルで暮らした経験があり、「今」を楽しむ、やりたいことをやりたい時にやるブラジルの人たちの生き方に触れた。子どもの頃からモノ作りや絵を描くことが好きだった岩本さんは、帰国後に暮らしていた愛知県で織物を目にする機会があり、元々好きだった麻を織る技術を学ぶため、妻と生まれたばかりの娘とともに宮古島に移住した。

宮古では、妻が外で働き、岩本さんは家事や育児をした。宮古上布の熟練の織り手で九十歳の下地ミツさんに弟子入りし、上布の機織りを学んだ。宮古では糸を作る人、織る人など、工程により分業が一般的だが、ミツさんは休み時間もブーの糸を績んでおり、昼食後は寝転んでブーの繊維を裂いていた。夫を早くに亡くし、女手一つで五人の子どもを育てたミツさんは、「背中に〈根性〉の文字が浮かび出ているような人だった」と岩本さんは語る。厳しかったが、孫のようにかわいがってくれたミツさんのことを、今も時々思い出す。

岩本さんは、二〇一一年から苧麻績み保存会事務局職員として苧麻の糸作りをするお婆さんたちと関わってきた。染織活動に専念するため、二〇二〇年に退職してからは、夜はアルバイトをし、朝は妻子の弁当や食事を作り、家事の合間に機織りや藍建て、苧麻績み、苧麻や藍の畑仕事などに励む。

腰機^{こしばた}で織った作品「苧麻と2022」には、自分が今後、「苧麻とともにありたい」という決意表明と、「宮古で長く続いてきた苧麻の文化がこれからも続いていくように」という祈りを込めた。

腰機の道具には、段ボールやダブルクリップ、竹串、巻きすをばらした棒など、身近なものを使った。苧麻の繊維と手績み糸を二重構造で反転させながら織り、最後は織り始めとつなげて輪にした。輪にするために、終わりの方は機の道具を抜いていき、手で苧麻の繊維を入れ込むのだが、「織る」というより苧麻の糸と戯れているようだったという。

宮古に来る時には、布や糸などの「モノ」に惹かれていたが、移住後はそれらを作る人たちと深く関わる中で、「モノ」より「人」に思いを寄せるようになった。「#世界へ2022」は、宮古で出会った個性の強い人たちのことを思いながら、苧麻に触れ、苧麻の均一でない様々な姿を織り込んだ（写真13）。

上布は規格の枠の中にはまっついていないといけない。人にもよるだろうが、岩本さんはそれだけでは視野が狭くなると感じた。腰機は高機や地機と違い、機の形の制約を受けない。持ち運びもできるし、ねじったり輪にしたり自由に作れる。道具がシンプルに、原始的になるほど自由度が増す。岩本さんは、規格に忠実な宮古上布の機織りと、規格にとらわれない自由な作品作りの両方をやることで、自分の中のバランスをとっている。

「腰で経系のテンションを調節するというのは糸に優しい織り方」と岩本さんは言う。高機は経糸が常にピンと張った状態なので、糸に無理をさせることになるが、腰機は自分が機と一体化し、自分の腰で経糸の張り具合を調節するので、経糸に無理をさせずに緯糸を入れられるという（写真14）。腰機で織った布は風合いがまるで違う。その風合いには織り手の身体性が浸透している。

「手仕事は人間にとって、とても重要で大きな可能性がある」と岩本さんは最近、特に思うようになった。染織というのは、技術の伝承においても、仕事としても難しい部分があるが、「みんなで楽しみながらやっていたら、きっと後続く人も出てくるだろう」と希望を持っている。

四、家族のために織る

八重山諸島の小浜島では、祭祀のおかげで、家族のために布を織り、着物を作る文化が受け継がれている。

一年の豊作を感謝し、向こう一年の五穀豊穡を祈る小浜島の結願祭^{キツイガン}には奉納芸能がある。二日目の正日^{ショウニツ}、嘉保根御嶽^{カフニツ}で、棒術、獅子舞、舞踊、狂言などの芸能が島の人たちによって神に奉納される。三線^{サンシン}、笛、太鼓が奏でる調べが歌声とともに響き渡る。色とりどりの衣装を身に纏い、顔に化粧をした子どもから大人までが、御嶽の舞台で演目を披露していく。子や孫の演じる姿を誇らしげに見守る家族たちのほころんだ顔が微笑ましい。

小浜島の結願祭の奉納芸能には、「苧引^{ブービキ}」、「総掛^{カシカキ}」、「天加那志^{テンガナシ}（布晒）」という上布を作る工程を踊りにした演目がある。「苧引」は苧麻の繊維をとり出す工程だ。紅型衣装を右肩袖抜きに着た二人の女性が、苧麻の長い繊維の端を束ねたものを手に踊る（写真15）。

小浜島では、女たちが家族のため、子や孫のために機織りをしてきた。結願祭で男たちが着ている濃紺の着物は「紺地^{コンジ}」と呼ばれる祭りの正装で、苧麻の糸を島の藍で染めて機で織ったものだ。

西表郁さん（昭和十三・一九三八年生）は手績みのブーの糸へのこだわりがある。人から「気が長い」と言われるが、糸から自分で作って織った着物に値打ちがあるのだという。「祭りで着ても全然違うさ。手績みの糸で織った着物はピンとしている」。台風で二、三日家から出られない時には糸を績む。「女はね、ご飯食べて片付けて、寝る前はちよつとでも糸を績む。百歳になるまで婆ちゃんもやっていた」。

白保ナツ子さん（昭和七・一九三二年生）は、姑が残してくれたブーの手績み糸を使い、家族のために機織りをする。脑梗塞で倒れた姑を三十年近く家で介護した。姑は家事はやらなくなったが、ブー績みだけは続けていた。ナツ子さんは子や孫の名前と着物の種類を表に書き入れ、誰にどの着物を織ったか、まだ織っていないかをチェックしている。九十歳を過ぎたナツ子さんだが、織らないといけない着物がまだたくさんあり、「命が足りないさー！」と明るい。

二〇二三年七月に一〇四歳で亡くなった山城ハルさん（大正八・一九一九年生）も家の敷地で育つブーを刈り取り、繊維をとって、糸を手績みし、機織りをしてきた（写真16）。九十八歳の時にブーで織った着尺は、藍に染めて仕立てられ、次男の着物になった。ハルさんの家の箆笥の引き出しには、苧麻や芭蕉の糸を手績みし、機織りした着物がたくさんしまわれていた。

おおたけぜんりゅう
大嵩善立さん（大正十二・一九二三年生）は、亡き母が織った紺地を結願祭で身に纏っていた（写真17）。母が夜なべしてブーの糸を績んでいた姿を思い出す。善立さんは大東亜戦争中、西表島でマラリアに罹り、小浜に帰ってきた。高熱で震えが止まらない善立さんに、母は糸芭蕉の茎を叩いてやわらかくしたものを水枕代わりにし、床を外して善立さんの頭に水を流して看病してくれた。

小浜島には高価な「買い」着物より自家製の手織りの着物こそが上等だという、ゆるぎない価値観がある。どんなに立派でも高価でも、買った着物では誉められない。小浜島のお婆さんたちは、子や孫の顔を思い浮かべながら機織りをする。気持ちに張りが出る。祭りのために島にやってきた孫が自分のお手製の着物を着て元気に走りまわる。孫の舞台での活躍に目を細める。亡くなった大盛キヨさん（昭和六・一九三一年生）も「自分で織っていないと豊かに生きられない」と言っていた。豊かさは自分の心の内側から滲み出る（または沸き起こる）喜びに根差している。小浜島の人たちには、消費社会のからくりに惑わされない確固とした信念がある。

第四章 見えない苧麻の糸と人

一、導かれる

宮古島の漢那明美さん（昭和二十五・一九五〇年生）は、長い間、苧麻にも上布にも関心がなかった。体が病みがちな八十代の母が「苧麻績みがしたい」と口にした時、「ブーって何？」と思った。聞けば、小学校高学年の時、苧麻績みをする授業があったそうで、その時は苧麻績みなど嫌だったらしい。それなのに七十年も経って、「ブーの糸を績みたい」と言う。母が元気になるならと、明美さんは織物組合に行き、ブーの繊維を一筋もらってきた。母に渡すと、「やり方忘れたから、あんた習ってきて」と言う。母のために苧麻績みを習っている間に、母は脳出血で寝たきりの状態になり、苧麻績みすることなく亡くなった。

ブーの繊維をもらって帰っても、明美さんは最初それをゴミくらいにしか思わなかった。ところが苧麻績みを教えてくれた友利ヒデさんの手がまるで踊っているかのように美しく、魅せられてしまった。ブーの糸の美しさにも感動を覚えた。そんな明美さんは、下地ヨシさんの跡を継ぎ、現在、宮古苧麻績み保存会の会長を務めている。

二、突き動かされる

八重山上布の作家で研究者でもある新垣幸子先生（昭和二十・一九四五年生）は、会社勤めをしていた二十代の頃、「会社員には定年がある。年をとってもずっとできる仕事って何だろう」、「自分にしかできない仕事があるんじゃないか」と思っていた。手仕事をしたかったので、那覇の壺屋や首里の紅型工房を訪ね歩いていたが、染織作家の大城志津子先生の工房に立ち寄った時、大城先生の人柄の深さと機織りの奥深さに触れ、織物をやっていきたいと思った。

沖縄県工業試験場（那覇市）で染織を学び、石垣島に戻った一九七三年、八重山上布と言えば白地に紅露の捺染が施された「白上布」だった。当時、石垣島には八重山上布の工房が二か所しかなく、どちらも捺染をしていた。捺染は小さな柄ならその良さが生かせるが、大きな柄だとプリントのように見えてしまう。沖縄（本島）で染色も学んできたので、ほかの色も織ってみたかった。

新垣先生は八重山上布について古文書で調べていた時、「赤縞上布」、「紺縞上布」の文字を見つけた。現在の紅露の捺染もその色の赤みから「赤縞」と呼ぶため⁽¹⁹⁾、「紺縞」は藍染めした紺だと分かった。古文書に「やまもも」という文字も見つけた。やまももを染めた経験があつたので色あいは分かる。

東京の日本民藝館に琉球王府時代の八重山上布があると聞いて訪れると、まさにそれが展示されていた。「紺が藍だ！紺縞だ！」。地がやまももでも染められていた。「やつぱり地染めしたものがあつたんだ！」。

民藝運動の柳宗悦が借金までして蒐集し、沖縄戦の戦禍を逃れた八重山上布⁽²⁰⁾が、時空を超えて新垣先生のその後の人生を決める道標となった。

「苧麻はありがたい繊維でねえ。目の前に植えてすーっと伸びていくでしょう。そして引いて續んでも糸がきれいでしよう。あんな美しい糸はそんなになんないと思う。薄い繊維が光に透けるでしょ。軽く削いだけでも美しい繊維がとり出せる。それを知ったからにはやらないと罰が当たる」。

宮古島の新里玲子さん(第二章 三、「糸の表情」で既出)は苧麻の糸の中で育った。祖母が苧麻の糸を續んでおり、糸を売るのについて行ったこともある。だが、それが上布になるとは知らなかった。

玲子さんは一九七二年、沖縄が日本復帰する直前に、航空会社の客室乗務員(当時の花形のスチュワーデス)から宮古上布の織り手に転身した。転身前、「自分の生きる道はこれではない」と感じていた。「自分の天職はどこにあるんだろう」と思いながら、手仕事に関心があり、県内の工芸産地を訪ね歩いていた。

宮古に里帰りした時、「宮古にだって宮古上布があるよ」と知人に言われ、下地恵康さんの工房を訪ねると大歓迎された。その時に「やってみようかな」と口にしたらしい。

織りを始めた当初、宮古島では十字紺の「紺上布」が宮古上布の代名詞だった。だが、玲子さんは、締機^{しめばた}の紺が細かく施された紺上布に「宮古の匂いがしない」と感じた。島の誰もが宮古上布⇨紺上布と考えていた時代に、玲子さんは手括りの紺という宮古のかつての伝統の技を受け継ぎながら、宮古の風土が匂い立つようなデザインと色彩を持

つ上布を織った。その独自性ゆえに異端児とされた時期も長かったが、今は国の重要無形文化財「宮古上布」の保持団体代表を務めている。そんな玲子さんも最近、十字緋の紺上布に「宮古らしさ」を見出すようになった。そこに宮古の人たちの強い気質が込められていることに気づいたのだ。

東京から単身、宮古島に移住した松尾由樹さん（昭和四十九・一九七四年生）は、機織りが子どもの頃からの夢だった。二十代の頃、由樹さんは東京に大きな渦のようなものを感じていた。その中で生きることにはなんだか違和感があった。モノ作りや手仕事に惹かれていたので、「伝統工芸の歯車のようになって次の世代に技を受け継げたら…」と漠然と考えていた。

二十八歳の時、本で目にした苧麻の糸と宮古上布の写真に心奪われた。バブル崩壊後の就職氷河期、企業に就職する気にもなれずにいたので、「生きる道を自由に選択してみよう！」と思い、宮古上布の作家の仲宗根みちこさんに弟子入りをお願いする手紙を書いた。

そうして染織未経験で、行ったこともない宮古島に渡り、二十年になる。由樹さんの話し言葉には宮古の人たちのイントネーションが染みついている。由樹さんは最初から宮古に骨をうずめるつもりで移住をしている。糸を洗っている時や、機にピンと張られた経糸に緯糸を通して織っていく時の苧麻の美しさに日々魅了されている。

おわりに

苧麻の手仕事をする人たちは、苧麻が内に秘める本来の美しさを引き出すために、自らの時間や技を苧麻に惜しみなく注ぐ。苧麻はそれを贈与として受け取り、人々に喜びや感動を与え、また成長もさせる。そして、高齢になり、体を思うように動かせなくなった女性たちには、静かに寄り添い、優しい安らぎを与える。

昭和村の五十嵐善信さんが剥いだ苧麻の表皮には艶がある。私には色気さえ感じられた。妻の玲子さんが引いた繊維は、目を見張るほどの美しさで、光沢に品があり神々しい。

昭和村のからむし引きは、からむし剥ぎ同様、一連の動作に無駄がなく、先人の知恵が凝縮された型がある。からむしの引き手は、「次こそはもつとよく引くぞ」の思いで作業に挑む。

からむし引きを体験した時、私はかつて習った弓道を思い出した。弓道にも型がある。昭和村でよく言われる「平らな気持ち」は弓道でいう「平常心」だろう。からむしの作業工程に禅につながる「道精神」がある。からむしは、人が美を指向し、心を整え、技を磨くように促す。

宮古、八重山の島々では、神と人との関係が形式に陥っていない。今も神と人が情でつながっている。人が神の声を聴き、亡くなった人を身近に感じている。見える世界と見えない世界が重なり合っている。

宮古島の豊見山カツ子さんは、両親亡き後、長く支えてくれた祖母が八十六歳の時に續んだブーの糸を大切にしておいている。「これを使ってしまったら、祖母が全部いなくなってしまうような思いがして使いきれない」と言う(写真18)。

石垣島の新垣幸子先生は、「大田(美代)さんは、親が一生懸命、ブー績みや機織りをやっていた風景を見て育ってきたから、ちょっと教えただけでブー績みもできるようになるのよね」と語った。

美代さんの心の奥に幼い頃の「原風景」が佇んでいる。母がブーを績んでいる。数人で集まって糸作りに励み、仕上がるど歓喜に沸いて皆で歌い踊っていた姿が泣きたくなるほど懐かしい。美代さんにとってブーの糸を績むことは、自分の中の原風景に立ち返ることなのかもしれない。

小浜島で男たちが身に纏う紺地グンズンの背後には、夜なべしてブーの糸を績み、機織りをしていた母や祖母の姿がある。いや、小浜だけではない。糸を績む女性たちの背後には、古代から連綿と続けられてきた糸を績む女性たちの数限りな

い生きざまがある。

宮古島で漢那明美さんの話を一緒に聞いていた新里玲子さんが明美さんに言った。「お母さんの中に種が潜んでいたわけさ。何十年もかけて熟成されて、あなたを通して花が開いてきている。私はそれを〈伝統の力〉と言っている。自分が直接関わらなくても、その空気感の中に島がある。その空気感の中で育つ人が、きっかけさえあれば（芋麻の手仕事の現場に）入ってくれる」。

私たちの生きる世界を支える見えない世界がある。見えない世界に、縁をつなぐ種のようなものが潜んでいる。そして何かのきっかけで人とつながり、目に見える働きを人に迫る。

竹富島のツカサが神から直接呼び出されるように、芋麻のカミから直接、使命を授かる人たちがいる。見えない糸に導かれるように、または、内側から突き動かされて、芋麻と関わっている人たちが、ここに挙げたほかにも少なからずいる。芋麻のカミは、しばしば天命探しをしている人の内側に入り込み、気づくと、魂の近くに居場所を占めている。人が芋麻のカミの依り代になっているのだ。

宿根性の芋麻は、条件がよければ、十年以上若々しい芽を出し続ける⁽²¹⁾。野太い牛蒡のような根を土の下深くに張りめぐらせ、頑強に大地を掴んでいる。

志村ふくみが鶴見和子との対談で、「植物の根は土の中で、土の中のことを全部覗いて見て知っている」というシュタイナーの言葉を紹介している⁽²²⁾。芋麻の手仕事をする人たちは、感覚を研ぎ澄ませて芋麻の求めに応えようとす。昔の宮古のお婆さんが言っていた「指が分かるよ。指が目よ」の言葉のように、触覚が視覚のように働いて糸の細さを一定に撚りつなぎ、聴覚のように働いて芋麻が伝える大地の言葉を聴いている。

そのためか、芋麻のカミは土地のカミと根元が同じであるように私には思えるのだ。なぜなら、芋麻のカミと内奥

でつながってしまった人たちには、その土地で生きてきた人たちの根つこの部分や、土地の記憶のようなものに思いを寄せる人がとても多いからだ。

半世紀にわたり、八重山と宮古の上布に取り組んできた新垣幸子先生や新里玲子さんが良い例だ。二人は天職を探し求めていた時に、苧麻のカミと内奥でつながった。地域で「伝統」の名のもと、変わることなく続けられてきたことも、歴史を遡ると生産効率を優先した一時期の様式に過ぎなかった。「伝統」が足枷となって、生命の息吹に満ちた豊かな創造性を否定し、抑え込んでいた。土地のカミはそれを喜ばなかったのだろう。

新垣幸子先生は八重山の「白上布」に、新里玲子さんは宮古の「紺上布」に風穴を開けた。新垣先生は、八重山の明るい海を渡る風や鳥、色濃く茂る緑の樹々や闇をほのかに照らす蛍などを、紺を手括りし、島の草木の多彩な色で染めて表現する（写真19）。

新里玲子さんは、宮古のお婆さんたちの働き者で勝気で愛情深い人となりにも惚れこみ、苧麻の糸を発注することで、お婆さんたちに生きがいを与えている。そしてお婆さんたちが手績みした、息を吞むほど美しい糸で、宮古の最初の風景を思わせる作品を色彩豊かに織り上げる（写真20）。二人は内奥でつながった苧麻／土地のカミの声に耳を傾け、魂で感じとった風土を上布に表現している。それは土地のカミを褒め称える仕事といえる。

昭和村の山内えり子さんが、からむし畑に足繫く通うのは、からむしへの深い思いがあるからだ。五十嵐カヨ子さんも「畑の一番の肥しはあるじの足あと」と話していた。

えり子さんは気が乗らない時に、義務感から織ることはしない。一度、村の地機講習会で焦って帯を織って後悔したそう。その帯を見るたびにがっかりしてしまい、苦勞してほめて糸に戻し、翌々年、織り直した。そんな経験があるから、「織ろう」という気持ちが出てきた時に織るようにしている。達成感も喜びも幸福感もまるで違ってくる。

昭和村では「自然と」という言葉が、「マイペースで」に近い意味でよく使われる。仏教語「自然法爾」の「じねん」だろう。おのずからなる。自分の内奥に何か大きな存在とつながる場所がある。そこに自分を同期させ、そこから聴

こえてくるものに耳をすます。

芋麻の繊維や糸は、織物になる前の単なる一段階として見過ごされがちであるが、それらは時として織物以上の力で人を魅了する。それが何によるのかと言えば、やはり、人が芋麻という草と魂で交感し合い、その手で、いや、見えない存在をも含めたアニミズムの身体により生み出されているからだと思う。文化的な「神」になる前の「カミ」が、芋麻と人の一対一のやりとりの中で感応されている。そして、その「一」という「図」は、見えない大きな「地」を背景にしている。

芋麻が呼び起こすアニミズムの心性は、宇宙に存在する見えないものの働きを人に密かに感じさせる。進化や発展という外向きの指向ではなく、自分の内奥（根っこ）に向かって掘り下げる「深化」の思想が、人が生きていく上で大切な意味を持つ。

私も芋麻／土地のカミに導かれている一人だ。芋麻に関する聞き書きを夢中になって続けてきたことで、「何もない」と思っていた自分にいつの間にか専門分野ができ、自分の存在意義をいくらか肯定できるようになった。未知の土地が、親しい人たちのいるかけがえのない土地になった。いまや、私の生命力は萎えている暇もないほどだ。

最後になるが、芋麻と人のあいだにあるものを語る上で、「アニミズム」という言葉は少し強い気がしている。主義、主張を意味する「イズム」でよいのか。もつとゆるやかな見方ができるのではないか。引き続き、感知、感応し、学びを深めながら、このテーマの追求を続けたい。

註

(1) 一九九四年に昭和村が始めた「からむし織体験生事業」で村にやって来た女性たちのこと。「からむし織体験生（織姫・彦星）制度」『か

- らむしの学校 からむしを知る・考える・伝える」 昭和村総務課企画係編集・企画 二〇一四年
- (2) 京都造形芸術大学（現 京都芸術大学）で、「地域学」を教えておられた中路正恒先生と、同大学の在学学生、卒業生で、中秋に各地でお月見をしている。
- (3) 京都造形芸術大学（現 京都芸術大学）「地域芸術遺産研究3」
- (4) 梅原猛『人類哲学序説』 岩波新書 二〇一九年 第一〇刷 三六頁
- (5) 岩田慶治『カミと神』講談社 二〇〇二年 第一一刷 二三四頁
- (6) 「マブイ」は魂のこと。地域により呼称や方法は異なる。
- (7) 首に掛けることもある。
- (8) 「ターシバイ」は「魂別れ」と書かれている。『竹富町史 第二巻 竹富島』 竹富町役場 二〇一一年 三八八頁
- (9) 「ミীনシカ」は「三七周忌」と書かれ、「死人と生存者との別れの日」との解説がある。宮城文『八重山生活誌』 沖縄タイムス社 一九八二年 四七七頁
- (10) 結び目は四つの場合と八つの場合がある。四つには「寄せる」、八つには（黄泉の世界と現世を）「分ける」の意味があると田中愛子さんは語る。
- (11) 二〇二二年には、約四十〜四十五日でブーの刈り取りをするとのことだったが、二〇二三年には、「気候のせいかな最近は五十日前後」とのこと。
- (12) からむし引きに使うカラムシヒキバン、ヒキイタ、カナゴは、昭和村ではアサ（大麻）の繊維を引くのに使われていたので、オヒキバン、オヒキイタ、オヒキゴとも呼ばれる。「オ」は「ヲ」（アサ）のこと。
- (13) 本稿では、方言のルビをカタカナで表記する。
- (14) 續んだ糸を入れていく宮古島の木製の容器「サスク」のこと。
- (15) 敬称は各人への筆者の日頃の呼び方に準じる。
- (16) マウ神は、生涯その人を守り続け、運気を振るい起す霊力をもつ神で「セジ」とか「スジ」を保有する守護霊。岡本恵昭『宮古島の信仰と

祭祀』 第一書房 二〇一一年 四五頁

(17) 方法は地域により異なる。

(18) 沖縄で「あの世」のこと。

(19) 新垣幸子先生のご教示によれば、茶系も昔は「赤」と呼ばれていた。

(20) NHK BSプレミアム『美の壺スペシャル 日本の美 再発見 く民藝が遺した美しきモノ』(二〇一五年)において、新垣幸子先生や日本民藝館の八重山上布が紹介された。

(21) 連作を避けて、通例12〜13年も経つと、株の植え替えが行われるのが慣いとある。菅家博昭『地域資源を活かす 生活工芸双書 芋からむし』農山漁村文化協会 二〇一八年 八〇頁

(22) 志村ふくみ・鶴見和子『いのちを纏う 色・織・きもの思想』藤原書店 二〇〇六年 第三刷 一三八頁

参考文献 (註に記載のないもの)

新垣幸子『八重山上布 新垣幸子の仕事』求龍堂 二〇一〇年

岩田慶治『カミの人類学 不思議の場所をめぐって』講談社 一九八五年

岩田慶治『木が人になり、人が木になる。 アニミズムと今日』人文書館 二〇〇六年 初版第二刷

岩田慶治『アニミズム時代』法蔵館文庫 二〇二〇年

梅原賢一郎『カミの現象学 身体から見た日本文化論』角川学芸出版 二〇〇三年

梅原賢一郎『感覚のレッスン』角川書店 二〇〇九年

オイゲン・ヘルゲル『ビギナーズ日本の思想 新訳 弓と禅 付・「武士道的な弓道」講演録』魚住孝至訳・解説 角川ソフィア文庫 二〇二二年 二二版

大久保裕美『機の迪』昭和村からむし織後継者育成事業実行委員会 二〇〇八年 第二版

奥野克巳・清水高志『今日のアニミズム』以文社 二〇二一年

菅家博昭『別冊会津学 Vol.1 暮らしと繊維植物』 二〇一八年

澤地久枝『琉球布紀行』 新潮社 二〇〇〇年

新里博・新里信子『宮古上布の歴史と染色技術―併、その将来展望―（修訂版）』 渋谷書言大学運営委員会 一九九九年
中路正恒編集責任『地域学』 京都造形芸術大学 二〇〇五年

『会津のからむし生産用具及び製品』 昭和村教育委員会 からむし工芸博物館 二〇一三年

『改訂版 おばあたちの手技 ―宮古諸島に伝わる芋麻糸手績みの技術―』 宮古芋麻績み保存会事務局 二〇一七年

『織の海道 八重山・宮古編』記録集 「織の海道」実行委員会 二〇〇二年

『そらとぶこぎん』第二号 津軽書房 二〇一八年

『竹富町史 第三巻 小浜島』 竹富町役場 二〇一一年

実地調査

・ 期間 二〇一五年五月～二〇一三年十月

・ 地域 福島県昭和村、沖縄県宮古島市、石垣市、竹富町

・ 以下の映画制作協力時の取材（二〇一二年一月、三月）を含む。

映画『ブーンミの島』（二〇一三年）

監督 春日聡

協力 宮古芋麻績み保存会

制作・著作 国立歴史民俗博物館

謝辞

芋麻の話聞かせてくださった多くの方々に心より御礼申し上げます。

写真



(写真 1)
昭和村「からむし織」(イメージ)。 山内えり子さんが糸を手績みし、地機で織った。2021 年 5 月



(写真 2)
竹富島 内盛スミさん 2018 年 11 月



(写真 3)
昭和村 からむし剥ぎをする五十嵐善信さん
2021 年 7 月



(写真 4)
昭和村 からむし引きをする五十嵐玲子さん
2021 年 7 月



(写真 5) 昭和村 五十嵐玲子さんが引いたからむし(表皮からとり出した繊維) 2021 年 7 月



(写真 6) 宮古島 松原良子さん 2019 年 1 月



(写真 7) 宮古島出身の大田美代さん 2018 年 11 月



(写真 8)
昭和村 五十嵐カヨ子さん（ご本人が写真提供）
時期不明



(写真 9)
昭和村 本名オマキさん（ご本人が写真提供）
2021 年 9 月



(写真 10) 宮古島 下地ヨシさん 2016 年 4 月



(写真 11)
昭和村 刈り取ったからむしの茎から葉を取り除く
山内えり子さん 2022 年 7 月



(写真 12)
昭和村 からむしで織った布にこぎんを刺す
山内えり子さん 2018 年 5 月



(写真 13)
宮古島 岩本大輔さんの作品「#苧麻と 2022」
2022 年 4 月 「光の ART 展Ⅷ 光と影 - SHADOW -」
(三重県伊賀市「史跡旧崇広堂」) にて



(写真 14)
宮古島 腰機で「#苧麻と 2022」を制作中の
岩本大輔さん 2022 年 3 月



(写真 15)
小浜島 結願祭 「苧引」 2016 年 11 月



(写真 16)
小浜島 山城ハルさんと手績みのブーの糸
2017 年 11 月



(写真 17)
小浜島 紺地を纏う大嵩善立さん 2017 年 11 月



(写真 18)
宮古島 豊見山カツ子さんと祖母が績んだ糸
2022 年 3 月



(写真 19)
新垣幸子先生と八重山上布 2019 年 11 月



(写真 20)
宮古島 新里玲子さんと苧麻の繊維
背景に宮古上布 2019 年 11 月